

●中聖牛の組立と玉石投入のボランティア募集 12月8・9日(土日)午前10時から15時 100人募集

●中聖牛を組み立てるステップル作りのお手伝いをお願いします 12月5日(水)13時~15時 里山草内倉庫 農免道路 東側

●先日県外研修で豊岡市へ出かけました。その折り田結の湿田で松島興治郎氏がコウノトリ保護運動の大役を果たされたとのお話がありました。神戸新聞総合出版センター社から「コウノトリ再び大空へ」を松島興治郎氏が寄稿されていたので、紹介いたします。

但馬のコウノトリ保護活動の始まり コウノトリは、日本にすむ鳥の中では最も大きく翼を広げると2メートルにもなる。江戸時代に、捕獲が禁じられ保護されていた時は、日本各地に住んでいた。しかし、明治に入ると猟銃の解禁に伴う乱獲などで数が減り、主として兵庫県の但馬地方で見られるようになった。但馬地方では、コウノトリは常に里の人々とともにあり、大正から昭和初期には50~100羽が生息していたといわれている。コウノトリの生息数が極端に減ってきたのは、第二次大戦のころからである。戦争末期にはコウノトリが栄巢する松の木が溶剤として乱伐され、戦後の食糧難の時代にはコウノトリが田んぼを荒らすと誤解されて厄介者扱いされた。兵庫県における本格的なコウノトリの保護運動は、1955年(昭和30年)、当時、兵庫県知事の職にあった阪本勝氏の提唱によって始まった。

国内種の絶滅 松島興治郎(豊岡市立コウノトリ文化館、里山の会理事長播川司氏の同級生)

コウノトリの生と死を翻弄してきたのは人間である。とくに第二次世界大戦の末期には、コウノトリが好んで栄巢する松の木が無制限に伐採され松根油の採取や建築用の材木、炭の原料などにあてられた。戦後の食糧難の時代にはコウノトリは田んぼの稲を踏み荒らす害鳥として銃器などで駆逐され、四散してしまった。さらに、湿田は耕地整理が進められて乾田となり、コウノトリの餌となる魚や小動物もして減少していった

続く昭和30年代から始まった高度経済成長もコウノトリの激減に追い打ちをかけた。私たちのライフスタイルが便利さや大量生産を求める形に変わり、大量消費、大量廃棄により自然環境が急激に変化した。

とどめは、農業の急速な近代化に伴う強力な農薬の散布だった。コウノトリの餌となる魚や昆虫などの小動物が死滅しただけではなく、水田生態系の頂点に立つコウノトリは、食物連鎖による化学物質の濃縮蓄積で、産卵はするもののヒナが孵ることはなくなった。コウノトリ自体の高齢化や、個体数が少ないための近親交配なども、卵が孵化しない要因になったと考えられる。

地元では、どんどん姿を消していくコウノトリを救おうと1955(昭和30)年、豊岡を中心に生息地のある各町で特別天然記念物コウノトリ保護協賛会(後に但馬コウノトリ保存会と改称)を設立した。コウノトリ保護の機運は全国的にも世界的にも広がっており、1956(昭和31)年には、国の天然記念物に指定された。しかし、現状は厳しかった。

出石町などから豊岡盆地に移ってきたコウノトリは転々と営巣場所を変えていたが、1953(昭和28)年以来、豊岡市の福田に営巣していたつがいが、1958(昭和33)年5月、一羽のヒナを孵らせた。このヒナの様子は、私が所属する豊岡高校生物部員によって7月8日の巣立ちまで、毎日克明に記録された。私も授業が終わると仲間と望遠鏡などの器具を抱えて駆けつけ、夢中で活動した。

この年は、国際的にコウノトリの年でもあり、生息調査を行う「コウノトリ センサク」の年でもあり、豊岡市周辺では10カ所の営巣地と21羽が確認されている。

1958(昭和34)年4月福田のつがいが、さらに一羽のヒナを孵した。結局、このヒナが豊岡地方での最後の野生鳥のヒナとなるのだが、その後の行方は分からない。

その後も毎年、何カ所かで営巣するが孵化は見られず。それどころか、事故や病気でコウノトリは減少の一途をたどる。その内容は、1959(昭和34)年7月に八鹿町伊佐で一羽が感電死。1960(昭和35)年2月に豊岡市内でイタチ捕りのトラバサミにかかったものが保護され、回復したのち放鳥。同年5月には、両足が折れたものが保護され、神戸市立王子動物園で治療したが死亡。同年8月には豊岡市内の農道で衰弱死したメス腐乱死体が発見。1961(昭和36)年6月には出石町内で見つけて保護したが助からず。さらに同年8月には豊岡市内で腐乱死体が発見…といった痛ましさである。

保存会の祈るような気持ちとはうらはらに、コウノトリは11羽にまで減少してしまった。できるなら時間を止めたい、止めるだけでなく時間を過去に戻したいような思いだったろう。

そんな中、国際的な鳥類保護期間のアドバイスもあり、国と県ではコウノトリの人工孵化へと動き出し、豊岡では、王の鳥が飛びまわれるだけのフライング・ゲージの建設が始まった。人工飼育には賛否両論あったが、保存会は、必ずいつか自然に返すための一時的な保護であるとコウノトリに固く誓い捕獲に取り組んだ。

この間にも、私は、本業のカバン製造の仕事の合間をぬって、コウノトリの観察や調査、捕獲にかかわり、し

だいに本業の仕事や家業の農業以上にのめりこんでいった。

1965(昭和40)年2月、一つがいの捕獲に成功し、人工飼育の増殖計画がスタート。同年5月、私は飼育場の職員となり、コウノトリと一緒に飼育場に住み込むことになった。

捕獲したつがいは、抱卵はしたもののヒナは孵らず、しかも、メスは看病の甲斐もなく6月に死亡。感染症によって卵が卵管に詰まったままになってしまう病気だった。飼育に踏み切って間もなくのことで、ショックは大きかった。残ったオスも骨折と腹部内出血で死亡した。何のために捕獲したのか、空っぽのゲージを見つめて泣いた。

西洋ではコウノトリが赤ちゃんを運んでくるといわれているが、ペアリングに際してのコウノトリは実に神経質で、選り好みが多い。飼育場では、その後も、中国から神戸市立動物園に贈られたコウノトリを借り受けてペアリングを試みたりしたが、良い結果は得られなかった。

一方、野生鳥も、豊岡市の人口巣塔にいたコウノトリが1971(昭和46)年5月25日、死亡。弱っているところを犬に襲われ、手当の甲斐もなく逝った。体内から高濃度の化学物質が検出された。これで、ついに、国内の野生のコウノトリは絶滅した。

ヒナ誕生から大空へ帰すまで。人工飼育が始まって10年もたつと、成果が思わしくないこともあり、コウノトリへの人々の関心はしだいに遠ざかっていったように見えた。田島コウノトリ保存会の活動は豊岡市に引き継がれ、私は、市の職員となった。先は見えないが、諦めたわけではない。コウノトリと交わした約束がある。必ず、いつの日か、大空に返してやりたい。今年こそ、今年こそと祈り続け20年が過ぎた。20年の間に飼育場で生まれた卵は55個になる。しかし、大半は無精卵で、残りの卵も孵化することはなかった。

1985(昭和61)年、大きな転換が訪れた。旧ソレンのハバロフスク地方から、コウノトリの幼鳥6羽が送られたのだ。7月27日のその日、私は待ちきれずに新潟空港まで迎えに行った。空港から豊岡までは陸路で約14時間、ようやく飼育場に到着。新しいゲージに入った彼らは、元気よくドジョウをつついた。

ペアづくりには3年かかるか、4年かかるか、長丁場だ。しかし、これまで待ち続けた年月に比べれば、どれほどのものでもない。しかも、農薬などに汚染されていない元氣は野生の若鳥だ。大いに期待できる。

6羽の内訳はオス4羽、メス2羽だった。最初は集団で飼育、3年目に入ると、2組のペアができた。ペアはそれぞれの新居に移り、元号が平成に変わった年の3月から巣作りを始めた、翌4月、二つのペアは計7個の卵を産んだ。まだか、まだか、たのむぞ、がんばれ、心配で、心配で、自分で卵を抱きたい心境だ。そして5月16日、「ピー、ピー」というかわいらしい鳴き声とともに待望のヒナが誕生した。待ちに待った瞬間だ。それまでの24年の歳月は吹き飛び、親鳥がかいがいしくヒナの世話をする当たり前の光景が、とても新鮮に映る。ことばにならない感動が体中に満ちていく。

二日後、2羽目が孵化、こちらも旺盛な食欲で親鳥を忙しくさせている。翌日、3羽目も孵化したが、小さくて弱弱しく、残念ながら二週間足らずで死んでしまった。10月になると、2羽のヒナ鳥は親鳥と変わらないほどの大きさに成長。

1991(平成3)年、「コウノトリ飼育場」は、「コウノトリ保護 増殖センター」と改称され、翌年、兵庫県は「コウノトリ将来構想調査委員会」を設置し、コウノトリの将来に向けて大きく動き出した。1993(平成5)年には、コウノトリの野生復帰となるステージとして、豊岡市祥雲寺に「兵庫県コウノトリの郷兼公園」の建設が決まった。保護、増殖センターでは、人工飼育で生まれた第二世代のペアリングが成功し、1994(平成6)年には記念すべき三世代のヒナが誕生した。その年の4月から、但馬全域でビッグイベント「但馬・理想の都の祭典」が始まっており、国内はもとより海外からも大きな関心を集めることになった。

祭典は一年間に及ぶロングランだったが、翌1995(平成7)年、阪神・淡路大震災が発生、県庁所在地の神戸を中心に甚大な被害を受け、多くの犠牲者が出た、そんな非常事態の中でも、公園建設の準備が続けられたことを深く感謝したい。

1998(平成10)年になると、繁殖も軌道に乗り、飼育数は50羽を超えるまでになった。1999(平成11)年11月には兵庫県コウノトリの郷公園が完成、私は、そこへ移ることになった、2002(平成14)年に退職し、豊岡市コウノトリ文化館に勤務することとなったが、その時には飼育数が百羽を超えていた。素晴らしい飼育スタッフにも恵まれ、その年以降、毎年、新たなペアが誕生しており、喜ばしい限りだ。

思えば40年間、朝起きて夜寝るまで、ときには寝るときでさえも、ずっとコウノトリと一緒にだった。最初のヒナが孵れるまでの24年間の長かったこと。希望と落胆、励ましと挑戦。人工孵化に成功した後の、不安や喜びが入り交じった日々、言葉にできることは、あまりにも少ない。

豊岡で生まれて、豊岡で育った私は、子どものころからコウノトリを身近にみてきた。高校時代には生物部員としてコウノトリの観察に明け暮れた。コウノトリのことなら何でも知っていると思っていたが、いざ、人工飼育に関わってみたら、わからないことばかりだった。質問できるような先輩もおらず、すべてコウノトリから教わった。これまで、多くの人に支えていただいたが、何よりも私に生きることを意味を教え、人生をおしえてくれたのはコウノトリだった。時間はかかったけれど「必ず、大空に返す」というコウノトリとの約束を守れたことが、今、何よりもうれしい。

(神戸新聞社総合出版センターにP26～37の掲載許可を依頼中である)